

東日本大震災から半年が過ぎ、懸命な復旧が進められている最中です。しかし記録的な豪雨や台風に見られるように、大自然の活動に終わりはありません。

倫理研究所・丸山竹秋会長は、有識者の見解を受け、地震などの災害発生中のみちを整理しておく必要を述べています。

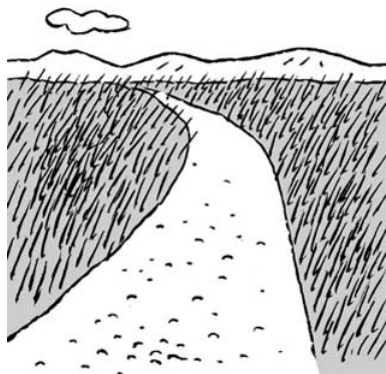
大地震の時は、まず丈夫な家具に身を寄せる。狭い路地、塀の脇、崖や川べりに近寄らない。揺れが収まった後、手早く火の始末をする。

一分過ぎて異常がなければまず安心。人命救助には消火が第一である。

海岸では津波、山地では山津波に注意する。余震をおそれずにデマに迷わない。秩序をまもり衛生に注意する。

(丸山竹秋著『地球倫理の時代』P70)
その上で災害時に重要なのが、その場で閃いた第一感を大切にすることだと強調しています。冷静さを欠いた第一感は身を滅ぼす恐れがあります。普段から地震に対する意識や災害時の知識がないと、正しい第一感 は働きにくいものです。

Y氏は大震災発生時、福島県で仕事でした。突然、地面が揺れたかと思ったら、目の前のお寺の石の灯籠が次々に倒れ、立ってられない状況となりました。とっさに玄關の戸を開け、閉じ込められるのを未然に防ぎ、そして近くの大きな木にしがみつきました。揺れが収まり一安心したものの、あまりの大きな揺れに、即座に自宅へ戻りました。道路が寸断された場所もありましたが、行けると思ったところは思い切って車を走らせ、迂回



直感と判断力を磨き 閃きを大切にする

絵・わたなべじゅんじ

に迂回を重ねてようやく到着。普段なら一時間のところ六時間もかかったのです。幸いにも家族は無事でした。しばらくして原発関係の避難勧告が出され、10キロ内の避難所に着の身着のまま避難しましたが、やがて20キロ圏内に避難するよう指示が出ました。何となく胸騒ぎがした氏ですが、外からの情報が入ってきません。電気、水道、ガス等は通らず、冷たいオニギリ一個が配られただけでした。

そんな状況下にあつて、友人からの連絡が携帯電話に入りました。ほとんど通じなかつた携帯が、その時だけ通じたのです。これは家も何もかも捨て、いったんは県外に出るべきだと直感した氏は、県外にしばらく泊まる手はずを整えました。そして、原発の重大事故が報じられたのです。

必要な情報が届かないのが、非常時の常識です。そこで頼りになるのは、自己の判断力と直感、自然に身を任せる心境と機に心じた一気の行動力なのかもしれません。

気象庁の要職を務めた木村耕三氏は、われわれ人類は、かつては危険を予知できる才能のようなものを持っていたように思う。そして、その危険から身を守るにはどうしたらよいかを直感的に知ることができたのではないだろうか。千年余りの昔から、何十回もの天変地異に耐えている古代建築の巧妙な構造は、経験を重ねて後に知り得たものではないように思われる」と直感について言及しています。

瞬間的に閃く直感は、じつは重大な「生きる知恵」ではないでしょうか。